

ラジュニャーって言うんでございますが、そのプラジュニャーのことを次のように訳させていただきました。「あなたの腕に抱かれて喜びも悲しみもあなたとわたくしとの存在をも忘れ果てた時、そこで般若を覚えました」。

以前、ヨーロッパから来た友だちに「この前に会った時の奥さんと今の奥さんとは違うんですね。どうしたんですか」と聞いたら、「ニューワイフ」といいました。新しい奥さんということです。前の奥さんとはすでに別れているんでございます。多分、いろいろ問題があったんでしょう。

誰の家庭を問わず、結婚生活には非常に辛いこと、苦しいこと、耐えないことがいっぱいあると思います。さらに、初婚された人と子供を持ち、教育をさせ、世が終わるまでの苦労を小説に書いたら何巻書いても足りないだろうと思います。ですから、相手と自分が二人でないという智慧、喜びも悲しみも相手と自分との存在も忘れ果てた時の智慧がないと、その家庭は最終の段階までは行けないのではないかとわたくしは思います。

また大乘仏教、特に菩提の法を称える『南無妙法蓮華經』の神聖なる思想とか宗教的に奥深いお言葉を貸していただきますと、智慧についてこういうこともいえるんじゃないかと思えます。この娑婆を生きているんですけれども、ちょうど鉢に泥が付かないように清浄無垢なる気持ちで娑婆をよく渡っているというところにまた般若波羅蜜っていうのがあるんじゃないかと。

最後に、その六波羅蜜の結論的なものをこういう風に訳させていただきました。「そうです。あなたは菩薩の化身。この身に波羅蜜を教えてくださいと現われてこられた菩薩の化身」。この世に現われてこられて救ってくださった菩薩の化身のことを考えて見ると、誰を見ても、愛している旦那さんから奥さんを見ても奥さんから旦那さんを見ても、本当に菩薩の化身のような気がするのではないのでしょうか。わたくしつくづく考えると、自分の回りの人たちが全部菩薩のようでお釈迦様のような感じがするんでございますが、こういうような気持ちを以て世渡りをしている時に家庭は平和であり、お釈迦様と一緒に生活ができるんじゃないかと思うんでございます。

わたくし日本語があまりうまくないので自分の気持ちを十分ご説明できないのがまことに残念でございます。もうだいふ時間が過ぎ去りましたので、ここで終わらせていただきたいと思えます。ありがとうございます。

## 弔辞

謹んで、大韓伝統仏教研究院院長・文学博士・金知見先生の御霊前に申し上げます。

金知見先生。突然のご訃報に接し、私には言葉もありません。どうしてこれほど早く、あっさりこの世を後にされたのでしょうか。奥様、お子様方のお悲しみと口惜しさは、察するに余りありますが、私ども東アジア世界の仏教者、仏教研究者、人文科学研究者にとりまして、韓国と日本の間に堅牢な橋を架け、東アジア世界の仏教研究のネットワークを作り上げられた先生を失うことは、まことに痛恨の極みでございます。

思い起こしますと、先生は、1970年頃、駒沢大学での修学を終えて、私どもの東京大学大学院人文科学研究科インド哲学専門課程にお入りになりました。私が先生と親しくご交誼を戴くようになったのは、それからでございます。以来数えれば30年になりますが、一夜の夢のようにも感じます。しかし、そこには楽しく、有り難く思い起こされることどもが沢山詰まっております。なかでも、学生時代、私がお世話になっておりました駒込の梅檀寮に先生がお越しになり、夜遅くまで語り合ったことや、先生がご帰国後、毎年のようにほとんど独力で開かれました国際仏教学術会議にお招き下さった時のことは、今も鮮明に記憶の中から甦ってまいります。ある会議の後、お国の各地をご案内いただいていた折り、突然何か話をするように言われ、四苦八苦しで講演させていただいたことも、今は楽しい思い出の一つでございます。私が韓国の仏教について次第に関心を深め、現在、「東アジア」という枠組みの中

で仏教を考えることが少しはできるようになりましたのは、まったく先生のお陰でございます。本当にありがとうございました。

私どもは、一昨年来、玉城康四郎先生、江島恵教先生、中村元先生、早島鏡正先生という、かけがえのない恩師・同僚の諸先生を失いました。先生は、まるでその後を慕うように、去る21日、静かに浄土へと旅立たれました。寂しい限りでございます。どうか、一日も早く還生の菩薩となられ、再び私どもの前にお姿を現され、私どもをお導きください。

まだ頭が混乱しているままに、あれこれと申し上げました。お許しください。粗辞ながら、これを持ちまして、弔辞とさせていただきます。

合掌

2001年 1月 24日

東京大学大学院人文社会系研究科教授  
インド哲学仏教学研究室主任

木村清孝(現在、鶴見大学教授)

## Kim Chi-kyŏn

Charles Muller

Along with the other contributors to this volume, I would humbly like to dedicate my essay to the memory of Prof. Kim Chi-kyŏn, one of the most respected and beloved scholars of our generation. I feel deeply privileged to have had the opportunity to spend lengthy hours of both study and conversation with Prof. Kim during my stay at the Academy of Korean Studies during the winter and spring of 1994. Prof. Kim, affectionately known by the graduate students of the Academy as the 'old Buddha' was a scholar of broad learning, and a man with a gentle heart that continually shined out through his glowing smile. His approach to life was visibly imbued by the Hwaŏm doctrine of harmonization that he was so deeply steeped in. As the first Korean Tōdai graduate in the field of Buddhist Studies, who went on to become a leading scholarly figure in his homeland, he holds perhaps the greatest individual responsibility for the close friendship that exists between Japanese and Korean scholars today. We will miss him.